

2013 年 7 月 20 日

なぜ里山なのか ～近代の自然言説から～

生田 省悟（金沢大学人間社会研究域）

【資料】

・ 今日の〈里山〉認識（１）

… 県土の約 6 割を占める “里山” は、そこで暮らす人々が手を入れ様々な形で活用することにより豊かな自然が維持されてきた地域であり、多くの生きものの生息地となってきました。…

しかしここ 50 年ほどの間に、都市部への産業・人口の集中と里山里海地域の過疎・高齢化が進み、放置される森林や耕作が行われなくなった水田が増加しており、里山里海の荒廃が見られるようになっていきます。

一方、私たちは、里山里海から食料や衣服の原料などの様々な恵みを得ています。輪島塗や九谷焼などの本県が誇る伝統工芸や文化も、この恵みによって育まれてきたものであり、本県の生物多様性の保全や地域経済・文化の発展にとって、里山里海の利用・保全は重要な課題なのです。

【2011 年度版『石川県環境白書』 第 1 部冒頭（抜粋）】

・ 今日の〈里山〉認識（２）

日本列島に暮らしした人々は、古来、豊かな自然の恵みを享受してきており、自然を持続的に利用する知恵と技、自然の風物を慈しむ文化を育んできました。

こうして育まれた日本の伝統的自然観は、自然を単に利用する対象ではなく、共感すべきもの、共に生きるものと捉えるものであり、変転する自然の存在を認め、それに手を入れながら付き合い合っていくという自然に対する態度の基底となっています。

このような自然観により、かつてわが国では、里地・里山の管理のような模範的な生態系管理が行われていましたが、自然征服的・非循環型の社会経済や生活のあり方が支配的となった 20 世紀において、わが国の自然生態系は衰弱してきています。残された自然生態系をこれ以上衰弱させないことはもとより、…

【「21 世紀 『環の国』 づくり会議報告」（2001 年 10 月） 4. 生態系の環（抜粋）】

・ 吉田絃二郎：いくつかの作品から 【いずれも漢字表記を一部改変】

（１）

真夏の青い稲田につままれた筑紫の平原を懐へば今もなほわたくしの胸は疼く。そこはきはめて平凡な水、平凡な稲田、平凡な並樹の連続にすぎない。あまりに単調な平原の自然である。けれどもわたくしにとつて忘るゝことのできない故郷の山であり、水であり、土である。

わたくしは地平線の上の白い雲を思ふ。萬頃の稲田を想ふ。水鳥の声を懐ふ。一筋の白き国道を惟ふ。

かつてそこに住み、かつてそこに悩みつゝあつた人々の多くは、すでに故郷の静かな土の下に眠っていることであらう。わたくしの四人の姉妹たちの小さな魂も亦故郷の土の下にしっかりと眠っている。

けれども今日も亦あの白い雲がもくもくと地平線の上にもものうげに湧いて来つゝあることであらう。

「水と草と白い道」『わが詩わが旅』（1928）

(2)

ここでは人々は隣人と共に生きるために生き、隣人と共に人間の生活を享樂するために生きてゐるやうに思われる。

「花が咲きました。」

「もう雲雀が鳴きました。」

「美しい夕焼けです。」

「早蕨が出ましたよ。」

「まだ雪が天城には残っています。」

かういつた自然の移り変りに対するきはめて平凡ではあるが、かれ等の人間生活にとつて最も本質的な関係を持つている筈の自然現象に対して、山の人々の神経は鋭敏に働いてゐる。

ともかく山の人々は自然が與うる生活のよろこびをそのままに受け容れ、自然が與うる生活の悲しみをそのままに嘯みしめてゐる。かれ等は都会人のやうに仕事のために、能率のために、人間生活の味を鵜呑みにするやうなことをしない。

「天城の春に居りて」『木に凭りて』(1934)

(3)

... 私たちは名もないほどの山間の小さな村にも真面目な聖書の研究者があり、真理への精進者があることを見出すであらう。そこにはいろいろな美しい人間の心のあらはれがある。尊い犠牲があり、忍苦があり、愛がある。その人たちは恐らく誰にも知られないで、かれ等が生まれた土地に生き、信じ、愛し、苦しみつつ静かに元の土に還り、眠つてしまふであらう。一つの詩も、一つの芸術も作らないで。

けれどもその人たちの生活がどうして都会の人たちや、所謂思想家や芸術家たちの生活に比べて劣つてゐるといふことができよう。かれ等の生活こそ星や草木のその如く自然であり、尊くあるのではないか。

私たちが第一に持たなければならぬ人は自然の人である。最も人間の仲間らしい仲間である。

「雨の日」『木に凭りて』(1934)

(4)

... 西行法師が武蔵野を通つたころはこのやうに世をはかなみ、世を捨てた人々も庵を結んでゐたであらう。しかし今もなほ武蔵野を歩けば草の蔭、丘のほとりに世を捨てた人々の心を感じることはできる。

三坪ばかりの花畑、畑の隅の堀井戸、丘をへだてて見る武蔵野の森、訪ねる人もなきままに形ばかりの門も草に埋められてゐるやうなわびずまひを陸稲の畑のあたりに見出すことがある。あわただしい都会の生活に耐え得ない人であるといへばそれまでのことであるが、それだけに小ひさくとも静かな自分ひとりの世界を静かに操守してゐる人の心の尊さをなつかしく思ふ。

「觀照の秋」『武蔵野にをりて』(1933)